

言語による絶滅危機度の差とその人口統計的要因

田 中 善 英

1. はじめに

動植物と同様に、言語も消滅する。

UNESCO RED BOOK ON ENDANGERED LANGUAGES によれば、日本には8つ、スイスには6つの危機的な言語があるという。同報告書は、危機度を「safe 安全」「unsafe 脆弱」「definitely endangered 危険」「severely endangered 重大な危険」「critically endangered 極めて深刻」「extinct 絶滅」の6段階で示した¹⁾。日本で危機的とされているものとその深刻度は、アイヌ語（極めて深刻）、奄美語（危険）、八丈語（危険）、国頭語（危険）、宮古語（危険）、沖縄語（危険）、八重山語（重大な危険）、与那国語（重大な危険）、スイスで危機的とされているものはロマンシュ語（危険）を含めた6言語であるが、ロマンシュ語以外の5言語についてはスイス以外の地域でも話されているため、スイス1国では言語を守るための対策を立てることができない。だからと言って放っておいてよいということでは当然ないが、今回の分析対象からは除外し、今後の課題としたい。

本稿では、なぜ言語による危機度に差があるのか、田中（2015）とは異なり、法制度や教育制度以外にどのような要因が考えられるか、考察する。

2. 分析対象言語の概要

2.1 アイヌ語（極めて深刻）

日本で最も絶滅に近い言語である。言語学的に見て、アイヌ語と同じ系統の言語はないとされる。ユネスコの調査ではアイヌ語の話者は15名、2007年に行われた調査では話者は10名以下かつ全員80歳以上（Janhunen & Salminen）とのことで、これを維持することは極めて難しい。

しかし、何の対策もとられていないわけではなく、1997年に「アイヌ文化

の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が施行されたのを受け、同じ年、札幌市内にアイヌ文化振興・研究推進機構の事務所が、東京都内にアイヌ文化交流センターが開かれ事業が開始された。

同機構の具体的なアイヌ語教育事業としては、アイヌ語講師を養成する講座のほかに、STV（札幌テレビ放送）ラジオで1998年よりアイヌ語講座を放送している。テキストは同ラジオのホームページで無料ダウンロードできるほか、2001年以降の放送内容も視聴できる。

2.2 奄美語（危険）

奄美語は、奄美群島の奄美大島を中心とした地域で話されている言語で、琉球方言の1つである。ユネスコの調査結果に話者数の統計はない。

2.3 八丈語（危険）

東京都八丈島で話されている言語で、ユネスコの調査結果では話者数は8000人とされる。本州から遠く離れているという立地条件から、本州との交流があまりなかったために日本語の古い形態が残っていると言われ、他の方言群から独立していると考えられることもある。

2.4 国頭語（危険）

鹿児島県ではあるが、沖縄県に近い沖永良部島などで話されている言語で、琉球方言の1つ。ユネスコの調査結果に話者数の統計はない。国頭語に限ったことではないが、島・地域による差がある。

2.5 宮古語（危険）

沖縄県の宮古島およびその周辺で話されている言語で、琉球方言の1つ。ユネスコの調査結果に話者数の統計はない。ただし、宮古語もまた、宮古島方言、伊良部島方言、多良間島方言といった下位方言に分けられるため、同じ言葉を話す話者数は少ない可能性がある。

2.6 沖縄語（危険）

沖縄諸島中南部で話されている言語で、琉球方言の1つ。ユネスコの調査結果では話者数は40万人で、話者数のわりには危機的とされる。

2.7 八重山語（重大な危険）

沖縄県の八重山地方石垣島を中心とした地域で話されている言語で、琉球方言の1つ。ユネスコの調査結果に話者数の統計はない。詳細は、田中（2015）などを参照されたい。

2.8 与那国語（重大な危険）

日本最西端の島、与那国島で話されている言語で、琉球方言の1つ。ユネスコの調査結果に話者数の統計はないが、与那国町の人口が約1700人であるので、多く見積もってもこの数字であろう。石垣島とも離れているため、言語的に見て八重山方言ともかなりの差がある。

2.9 ロマンシュ語

スイス南東部に位置するグラウビュンデン州で話されている言語の1つで、ユネスコの統計によれば、2000年時点の話者数が35095人である。ロマンシュ語の現状に関する詳細は、田中（2006）、田中（2008）などを参照されたい。

いわゆる国際化の波は、多言語国家スイスへも押し寄せている。2014年以降、5年毎に言語に関する統計をとることになり、その初めての集計結果が発表された。なお、回答者は複数言語を選択することができるため、この割合は、実際の人口とは直接比べることができない。また、2000年の統計までは、回答者は1言語しか選択できなかったため合計は100%となるが、2014年の統計では前述の通り回答方法が変わったため、合計は100%を超える。

	1970年	1980年	1990年	2000年	2014年
全人口	6011469人	6160950人	6640937人	7100302人	8041310人
ドイツ語	66.1%	65.5%	64.6%	64.1%	63.3%
フランス語	18.4%	18.6%	19.5%	20.4%	22.7%
イタリア語	11.0%	9.6%	7.7%	6.5%	8.1%
ロマンシュ語	0.8%	0.8%	0.6%	0.5%	0.5%
その他	3.7%	5.5%	7.7%	8.5%	20.9%
合計	100%	100%	100%	100%	115.5%

「その他」には、英語、トルコ語などが入る。国語の中ではフランス語のみが上昇しているが、OFS（スイス政府統計局）は、その理由の一部は回答方法の変更にあるとする。しかし、フランスに三方を囲まれたジュネーブでは、広

域 RER 計画が進行しており、交通網の拡充によって人口流入が進んでいる可能性も考えられる。人口動向については後述する。

3. 日本の危機的言語における取り組み

八重山語については田中（2015）で簡単に触れたので、ここでは、それ以外の言語における取り組みについて主なものを触れておく。

ユネスコの発表を受けて様々な取り組みが始まったが、学校教育においては、方言劇の実践が多い。奄美大島の芦花部中学校では、総合的な学習の時間を利用し、2年に1回全校生徒（約10名）をあげて方言劇を演じている。同じく龍北中学校でも年に1回方言劇等を披露する「島ユルタ発表会」を開催している。準備・練習には地元の話者からの細かい指導を受けることもあり、地域が協力していることがよく分かる。ただ、田中（2015）でも述べたように、あくまでも正課の中である程度の時間数を割いて取り上げなければ、確固たる言語力を身につけさせることは難しい。

方言劇以外の例としては、例えば、あまみエフエムでは、毎週日曜日に主なニュースを奄美語で放送しているが、週に1回約1時間であり、十分とは言えない。八丈語が話されている八丈島の八丈町教育委員会では、教材開発を行ったり広報紙を作成するなどの活動を進めている。与那国語が話されている与那国島の与那国町教育委員会では、方言と芸能の継承のため、わらべ歌 CD を製作している。

4. 人口統計的な要因

4.1 話者の数と年齢層

話者がいなくなれば、その言語は滅びる。滅びないためには、話者が必要である。当然、話すことのできる子ども達がいなければ、言語は生き残れない。従って、話者の高齢化が進んでいる言語は危機的である。いわゆる離島の場合、島内に高校以上の教育機関がなかったり、地域産業が弱いこともあって、若者はある一定の年齢になると島を離れることも多く、小さな島ほど高齢化が進んでいる。

「重大な危険」とされた八重山語が話されている中心地域である石垣市について詳しく見てみると、下表の通りである。2010年のカッコ内の数値は、1975年の数値を基準とした増減率、[] 内は2000年の数値を基準とした増減率である。

言語による絶滅危機度の差とその人口統計的要因

	0-14 歳	15-64 歳	65 歳-
1975 年	11019	20990	2648
1980 年	11516	24046	3257
1985 年	12068	25213	3894
1990 年	11457	25118	4670
1995 年	10325	25806	5646
2000 年	9238	27400	6653
2005 年	8651	28946	7585
2010 年	8637 (78%)[93%]	30180 (138%)[110%]	7989 (302%)[120%]

この表を見れば分かるとおり、幼少年齢人口は減り続け、高齢人口は3倍以上になっている。このことから、八重山語話者の高齢化が進んでおり、八重山語にとっては危機的な状況となっていることが分かる。

ロマンシュ語が話されているグラウビュンデン州についても見てみよう。2015年の数値は、2000年の数値を基準とした増減率である。

	0-19 歳	20-64 歳	65 歳-
2000 年	45009	113286	28449
2005 年	40741	116135	30927
2010 年	37591	120497	34533
2015 年	36141 (80.1%)	121035 (107%)	39434 (138%)

上表の通り、石垣市同様に高齢化が進んではいるが、2000年-2015年を比べてみると、グラウビュンデン州のほうが高齢化が早く進んでいることが分かる。それでも、ロマンシュ語のほうが危機度が低いのはなぜか。1つは、若者人口の多さがある。石垣市とグラウビュンデン州の人口統計の取り方に差があるので単純比較はできないが、それぞれで最も若い世代を比べると、グラウビュンデン州では19歳以下の人と、65歳以上の人と同じくらいいる。もちろん、これは州全体であって、全員がロマンシュ語話者ではない。また、ロマンシュ語圏は山間部を中心としているので、州平均よりも高齢化が進んでいる可能性もある。しかし、ロマンシュ語圏では、学校の授業がロマンシュ語で行われているため、未来のロマンシュ語話者を現在も育てているわけである。これが、八重山語の場合と決定的に違う。

4.2 話者の移動

一定数の話者が集中していなければ、その言語を使う頻度は下がる。例えば、家族の中でだけその言語を用いる場合より、家の外、すなわち学校や職場、町中でもその言語を用いるほうが、言語能力は高まる。また、テレビ、ラジオ、新聞等のメディアでもその言語が用いられていることにより、その言語との接触機会は増える。

また、他言語話者の流入が多いと、集中度が薄まってしまうため、その言語にとっては脅威となる。交通の便が良ければ良いほど流入の可能性は高まり、交通の便が悪ければ悪いほど脅威は弱まるが、一方で、その地域における経済が停滞する可能性もあり、バランスが難しい。その地域における経済活動が盛んでなければ、いわゆる「出稼ぎ」などを含めて言語話者が他地域へ流出してしまう可能性がある。

八重山語が「重大な危険」とされたのに対して、宮古語が「危険」とどまったことは、人口の流入数によると思われる。国勢調査の結果を、関連する自治体ごとに分けて比較したものが下表で、カッコ内は1920年の数値を基準とした増加率である。なお、2016年の数値は、各市役所が公表している数値による。

	石垣市	宮古島市
1920年	18930	49401
2005年	45183 (238%)	53493 (108%)
2016年	49141 (260%)	54260 (110%)

もともと石垣島より宮古島のほうが圧倒的に人口が多かったが、最近になって石垣島が急激に追い上げている。石垣島に竹富町を加えた八重山圏の人口で言えば、2014年に宮古島を上回った。これは、田中(2015)などでも述べた通り、石垣島に新空港ができるなど、石垣島へのアクセスが格段に向上したこと、石垣島の特に観光業が盛況で、石垣島の経済が全体的に見て好調であることなどにより、島外からの移住が急激に増えていることによると考えられる。これには「老後を離島で」といった不動産業界等のキャンペーンの影響もあり、そういったいわば非ネイティブはその島の言語を学ばずとも生活できることもあり、話者数増加にはつながらない。

ロマンシュ語が話されているグラウビュンデン州および、フランス語が話されているジュネーブ州の人口動向についてもここで見ておこう。

グラウビュンデン州の人口動向

	外国から	外国へ	他州から	他州へ
2000年	2385	1864	3305	4394
2005年	3211	2085	2758	3769
2010年	3849	2330	3288	3917
2015年	4283	2617	3535	4192

ジュネーブ州の人口動向

	外国から	外国へ	他州から	他州へ
2000年	15386	12760	3348	3254
2005年	16259	13476	2584	4036
2010年	22272	16927	2590	4458
2015年	24640	16331	3162	4708

どちらの州においても外国からの移住は増え続けている一方、外国への移住も増え続けている。他州からの移住数には大きな変化がないが、他州への移住はジュネーブ州においては増え続けている。ただ、残念ながら具体的にどこへ移住したかの統計がないため詳しいことは分からない。

しかしながら、2州の地理的状況を考えると、2州を同じようには扱えない。ジュネーブ州のすぐ隣のヴォー州でもフランス語は話されているし、ジュネーブ州を取り囲む外国はフランスだけである。要するに、ジュネーブ州に隣接している地域はすべてフランス語圏である。これに対し、グラウビュンデン州は、そもそも州全体でロマンシュ語が話されているわけでもなく、州内での移住によっても言語圏が変わる可能性がある。このことから、少なくとも、ロマンシュ語の話者数より、ジュネーブ州のフランス語話者数は減りにくいと考えられる。

4.3 人口の密集度合

石垣市の人口集中地域（DID²⁾）は石垣島の南西部にあり、平成27年度の「統計いしがき」によれば、その面積は5.1km²、石垣市の総面積において占める割合は2.2%である。この地域に市の総人口の66.6%が集中している。

これに対し、宮古島市の場合、人口集中地域は3.48km²、宮古島市の総面積に占める割合は1.7%と、石垣市の場合と大して変わらないが、この人口集中

地域の人口は、宮古島市の総人口のわずか 33%に過ぎない。この集中度合いの差は人口密度を見ても明らかで、石垣市の人口集中地域における人口密度は 6123.3 人/1km² であるのに対し、宮古島市の場合は 4935.6 人/1km² である。

この人口集中地域に住む人が、もともと島の人間なのか、他から来た人間なのかといった統計はないが、様々な人間が集中している空間においては、いわゆる共通語・標準語でのコミュニケーションが求められるため、方言を使う場面に遭遇することが少なくなる。

5. 結論にかえて

話者数を増やさなければその言語は滅びる。かと言って、誰でもよいから増やせばよいわけではない。また、言語習得開始時期については様々な研究があるが、いわゆる方言は、英語といった全くの外国語ではなく、生活のなかで耳にする機会がゼロではない言語であるから、幼い頃から、その方言に慣れ親しませ、学校・家庭内外で定期的に教えていくことが重要である。しかし、田中 (2015) でも述べた通り、ここには学習指導要領の「壁」がある。この「壁」を破るには、国が主体となって方言維持を推進する必要がある。また、せっかく習得した方言を使わなければ意味がない。方言を使う場として最も適した地元に残るための方策も同時に考えていく必要がある。

主要参考文献

- 東 照二 (2014): 『社会言語学入門 (改訂版)』, 研究社, 東京
石垣教育委員会 (2013): 『平成 25 年度石垣市の教育』, 石垣
石垣市 (2012): 『第 4 次石垣市総合計画』, http://www.city.ishigaki.okinawa.jp/home/kikakubu/kikaku/kihonkousou/2012_kihonkeikaku.pdf
石野博史 (1997): 「方言生活と言語行動 (身ぶり) のダイナミックス マスコミと方言」, 『國文學』 1997 年 6 月号 第 42 卷 7 号, 學燈社, 東京
井谷泰彦 (2006): 『沖縄の方言札 さまよえる沖縄のことば (ウチナーグチ) をめぐる論考』, ボーダーインク, 那覇
伊波普猷 (1998): 『沖縄歴史物語』, 平凡社, 東京
内間直仁 (2011): 『琉球方言とウチ・ソト意識』, 研究社, 東京
Evans, N. (2013): 『危機言語 言語の消滅でわれわれは何を失うか』, 大西正幸・長田俊樹・森若葉 訳, 京都大学学術出版会, 京都

- 沖縄歴史教育研究会 (2012):『新訂版 琉球・沖縄の歴史と文化』, 東洋企画, 糸満
- かりまた しげひさ (2006):「沖縄若者ことば事情—琉球・クレオール日本語試論—」 in 『日本語学』 2006年1月, 明治書院, 東京
- かりまた しげひさ (2013):「琉球方言とその記録, 再生の試み 学校教育における宮古方言教育の可能性」 in 『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』, くろしお出版, 東京
- 崎原恒新 (1999):『八重山ジャンルごと小辞典』, ボーダーインク, 那覇
- 真田信治 (2001):『方言は絶滅するのか 自分のことがを失った日本人』, PHP 研究所, 東京
- 真田信治監修 (2006):『新訂版 聞いておぼえる 関西 (大阪) 弁入門』, ひつじ書房, 東京
- 参議院法制局 法制執務コラム集「法律と国語・日本語」 <http://houseikyoku.sangiin.go.jp/column/column068.htm>
- 沢木幹栄 (2006):「方言使用の近未来的課題」 in 『日本語学』 2006年1月, 明治書院, 東京
- 高橋俊三 (2006):「八重山方言の特徴」 in 沖縄国際大学南島文化研究所 編, 『八重山の地域性』, 東洋企画, 糸満
- 田中善英 (2008):「スイスの言語政策について—ロマンシュ語の場合—」, 『フランス文化研究』 第39号, 獨協大学外国語学部フランス語学科, 草加.
- 田中善英 (2009):「スイス史におけるロマンシュ語 (1)」, 『フランス文化研究』 第40号, 獨協大学外国語学部フランス語学科, 草加.
- 田中善英 (2010):「スイス史におけるロマンシュ語 (2)」, 『フランス文化研究』 第41号, 獨協大学外国語学部フランス語学科, 草加.
- 田中善英 (2015):「八重山方言継承へ向けて—スイスの言語政策と比較して—」, 『フランス文化研究』 第45号, 獨協大学外国語学部フランス語学科, 草加.
- 外間守善 (2007):『沖縄の言葉と歴史』, 中央公論新社, 東京
- 中田龍介編 (2004):『八重山歴史読本』, 南山舎, 石垣
- 前新 透・波照間永吉 (2011):『竹富方言辞典』, 南山舎, 石垣
- 三木 健 (2003):『八重山研究の歴史』, 南山舎, 石垣
- 宮城信勇 (2003):『石垣方言辞典』, 沖縄タイムス社, 那覇
- 山本毅雄 (2006):「ぶらり日本語 方言の教科書が欲しい」 in 『日本語学』 2006年1月, 明治書院, 東京
- 山本忠行・河原俊昭編 (2010):『世界の言語政策 第3集 多言語社会を生きる』, くろしお出版, 東京
- 琉球大学国際沖縄研究所 (2013):『文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業 (奄美方言・宮古方言・与那国方言)』

注

- 1) 日本語訳は文化庁による。
- 2) 人口密集地域 (DID)：各市町村の境域内で人口密度の高い調査区 (人口密度 1km^2 あたり 4000 人以上) が隣接して、それが人口 5000 人以上の地域を構成する地区のこと。広大な工場地域・湾港施設・学校・都市公園・官公庁の施設がある地域は、人口密度に関係なく、これと隣接する人口密度の高い調査区の地域に含めている。